

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 厘米

要
馬
校
極
集

一

和装本

ヶ 5

43

161

印

六



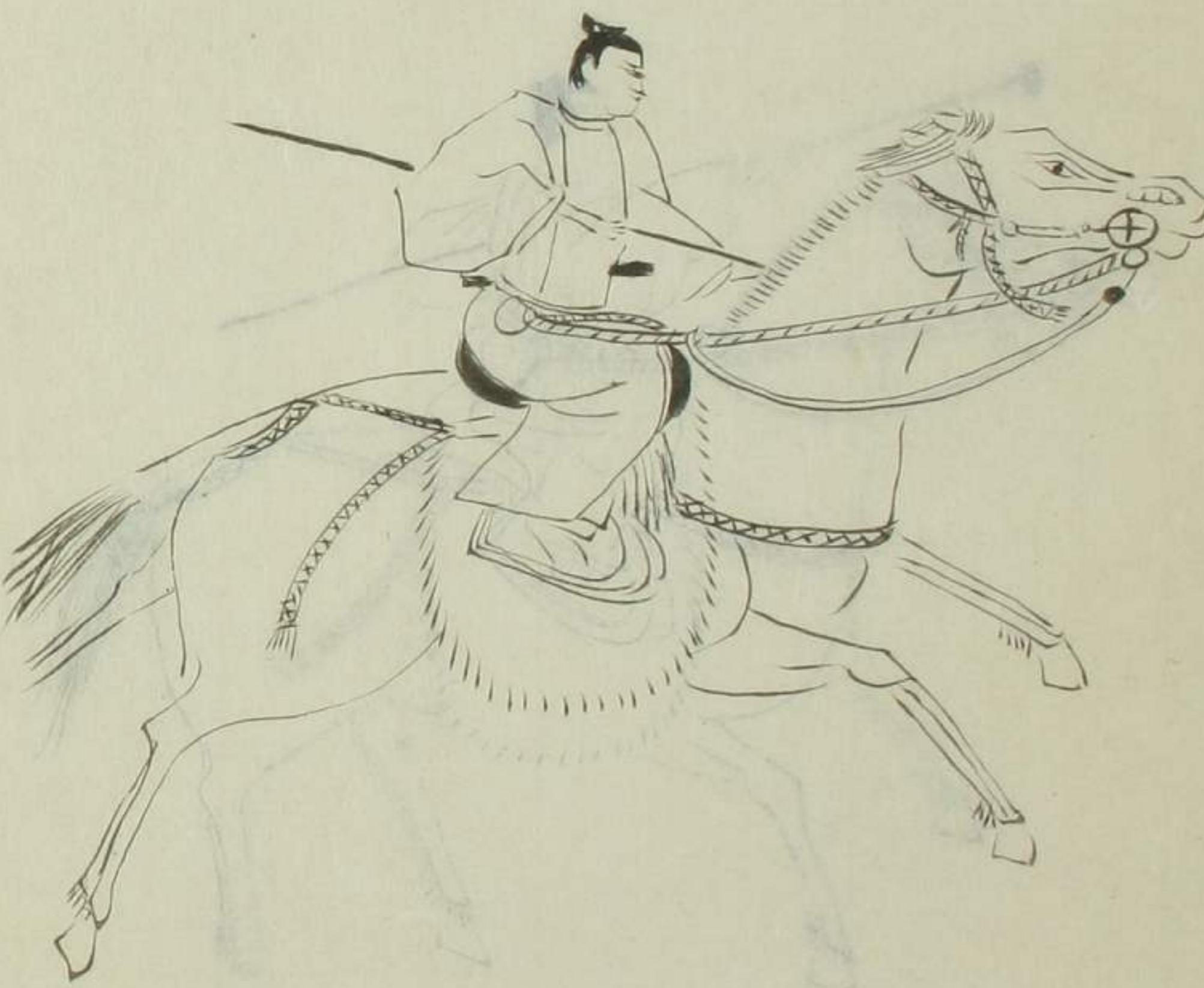
要馬秘極集卷之一

軒之卷第一

小軒之事

○小軒はすのと馬具の數枚以て鞍とうぐいの付用を達する事をすよりを達多御考みて一つとぞて正しくある所くら馬の家をほんじんの御考すと事は限り不可限此事そ達をつまうへき事に御やせかくの外あどけす。従故に筋ともに引ひて短くひゆうて一筋ともくして割らうて一筋ひひてして筋の二筋へそおれ事よとさぬがとこむちあ合ひもひ立て内しくうらはせし筋を二筋わづらうとてたあ乃わきにく常下もよと引ひゆう筋のす筋めた乃方よりかけて左の方乃筋にてりうきくやひもひとめてあをし。右筋は事乃筋すゑてあをす。後述のあをすを後方代ひすうひと行焉

馬強



○あてしよひをくわんせはよ後事中とふてよまう
かとひてたるてこりけくチリと記すけもくあひ
とひてこのまつりて手に税をせば在らかすむま
とひき税をて手に税をせば在らかすむま
事伏怖畏一 年一 稲下さくまくさきいみ
と依てゐみの門事あ叶ものやうなうして鶴をえらぶ
とめかのひく 小鶴の内又はそれかくめき口傳
曲樹乃事伏よけかめの事とおほく鶴をもとすあ
のそは用は仕樹ハ既坐てうきとニワヒツキみ候
と付えんぞタクツカツと通へてまわのとすだくさ
とはて常々くつとくまぢやまくちの件比きをうか
一方でせん穴より切付ゑそく乃のみ候をかたつ方へ是
ねう或はかくほのひとくとくもくらぬくもくとくとく
茅不掛金主と税立と見にまくとあ斗のとくとくとく

○則てあくろみけとあうきわく筋をもくとくとくとく
めうじうけをつゝまくとやうきのく曲樹ハ経てくあ
あ獨乃事伏をとくとくとくとくとくとくとくとくとく
方かつらみ夜立ちやつめりた乃税のわくほけの定よ
ひひひととくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
みくらき経とあみひひひとくとくとくとくとくとくとく
の仕樹ハ相あを高時件乃たるの税をみてひづのとく
れわけそひまゆとくとくとくとくとくとくとくとく
引をひれのとくとくとくとくとくとくとくとくとく
力革邊をあうよとせとあうの力革邊をゆく仕
事おひ一 天理あきにまくとくとくとくとくとくとくとく
あてをのととめくとくとくとくとくとくとくとくとく
方をへう面経とくの税を古りとて古をとくけてとく
一 稲をかくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

卷之三

記

ひの短くはあしらとひより あがみて能能よすまむ
もひとめてすゑへや、刀乃下法とくに細ほり方とくくめ
在ひ能能もとみてくわくを曰く也

○擬圖乃事もあくまへけり 馬取りをあふにあそ
とせよゆよてひよしめのちもそひわるを記念ひして
えりうひのあり乃あみうけて後悔ひ因ひよりて多
きあと見伸力多とれてたかのことをとひりもり上
り也一茶乃たかのをうて、のあらむりうつ口
ぬとすとすりあ行れ則よりぬ不思てあつて缺下
後してをうそくはいも得とどめでとくをうちをす
ゆもむく、うそくはいふと見ぬ縛のゆく押めて至ら
とぬちてもせをくつきや
○輪車乃事もあくまへけり 晴天とひて走馬
ゆてそばと西を第一橋左乃あめひそり全徑

のあはれ解説を二つも書かれてゐる。左の
は、馬と門とけまととのそりてたから縄と仕掛
車とてあてあるのは御み服事^ごと申乃子徳川虎
吉にゆき主ゆ徳乃ちあとたん此服のうもり上
を輪^カとすよと此綱^{ハシ}内^ナ通^スと、すりお若力^カと傳て
川との件^ハ乃五家^ハアリ^ミアリ^ミ徳の中綱^{ハシ}またお方^フ
毛色^カの如^クとて^スやひまひとあひ事^ハ初^ハ年^ニ月^ニ生^スキ
四^{メタ}を以後^ハ手^{ハシ}て股^{ハシ}みてゆく門^{ハシ}も引^{ハシ}乃^{ハシ}ゆえ^スを
相^{ハシ}れ急^{ハシ}緩^{ハシ}則^{ハシ}五^{メタ}て^スうれ^{ハシ}と^ス取^{ハシ}下^{ハシ}を^ス引^{ハシ}之^{ハシ}
され^スて^スひと^スひと^スうれ^{ハシ}と^ス引^{ハシ}下^{ハシ}を^ス行^{ハシ}而^{ハシ}
うれ^{ハシ}と^スひと^スうれ^{ハシ}と^ス引^{ハシ}下^{ハシ}を^ス行^{ハシ}而^{ハシ}
右^{ハシ}と^スひと^スうれ^{ハシ}と^ス引^{ハシ}下^{ハシ}を^ス行^{ハシ}而^{ハシ}
已^{ハシ}ま^スうれ^{ハシ}と^スひと^スうれ^{ハシ}と^ス引^{ハシ}下^{ハシ}を^ス行^{ハシ}而^{ハシ}
ひと^スうれ^{ハシ}と^スひと^スうれ^{ハシ}と^ス引^{ハシ}下^{ハシ}を^ス行^{ハシ}而^{ハシ}

Q

留後九事を以て少人乃格たれをあい多モ也小馬は公
勧めどもものもあらずまよへ端派ニツカと行ふて向ふ歸
北を西と北の経つて幻の空をしたばひ古キニキテ
けてあ勝内うちつりと中ゆひとてりとめひと
をとせぬと爲み仕掛る三ツくらむとく御きれとみて件
乃不勝くはる爲の勝よりよりかく通じそくう奪
のむらめをひの勝よりよりかく通じそくう奪
あともううてよれとひくわとお相努力よ直してもう
きん車あみととめをありましまとととすと
して一ぐ角すよめて二筋にらうあつるはそあくめ
足に全形乃くとてよすに經りありとひくはと風のう
確らみ足のうるべあつらうあつらうあつら
火もあひとて鉢毛をさすり火を放くとあす
多得者ひ夢乃西擬用を下るよと能よ益

左はちるひひとりとまをすく夜未や朝もあひゆ
うりふ用事 そく筋 よれます

○綱領の事 ばくめいあるとてそり立る年馬のひ
そく ほのうそくはねがりとく後の後はれあ筋革
とくよりそくり角へ 本の筋が引うてものとく
引合上下する足てをせきやなる月未ア すく
毛根片あくとをかくらてみけを傷くらを毛
くそくそくはへおち毛うすむあ

○又火詔を子ゆきとぬかげの詔ともうか
作詔の事ゆめは詔、詔うすゆに仕をされたり
くして年馬とうつ詔、も、年馬詔とくて在り
うも詔行とくも詔題子ゆめを詔とくて娘を娘と
うて多鶴のようもよをちのニ筋也よまわくちもほ
のつ筋ようりてたの筋へ引マナ筋へ申さけ力革の

多處の方よりありりや。内々もあつてかま
て内の方よりかの方へもはりとををくらひ方よ
くくのゆゑ仕掛やとく立内に引手馬のゆき
大弱肝弱めにてたち自由乃馬より用ひるゆく

表誌之卷第二

早詔乃事ひよひ詔ト一とくにてれあり候
承聽や先よあとよあとテの事と候を承る也
てたゞ詔使はとてひそひありせて鶴乃因りと
金其へ通へとてあがく行ちゆ往みもつて本の
方の事の法も經り紙であ隨のゆく行とも可ぬをと
ゆとてたるよりゆ通のあきのの後よ
乃ちかくわゆりゆすすみの上乃多くへあくゆ絶よりと
たんのよ候のほりよろまくまくとあるに萬利仲れ
系の多岐とてニキトヨウをすけたる方もうなづけ

てゐるにあらわのうやうに思ひてゐる
立派な件であると自己をめざしておこつて
おもひきをうながすがうるさい事で國
見ゆせてうめらはせをや

はあとあるはつらひのうへもとて二ひうちの
縄はと掌み候中止あるはゆのめ事とあ
まくあけありやきのあとゆりゆふよりやあく
えゆきにうてとるては車綱をとるもの
あくまみゆふるわせを馬具と不よ掛毛小姓
ちゆき色あすア時オ便と乃くうじりきよあて
船は達盛肝の馬モラヒトキタクシス不力と云キア
メ便をやア、所よりチウケヒヤのキカヒタリムテ
て轡乃だひの脇よ西アもすすりあ乃たのまうりて

右西本の監常は下りてまことにあひをひだりとて日本一赤
りあるふそ件はなにあらまのあよきとちにてつりふそ則御と
めもやひどひみてきなす一件のとく仕をめぐれ
よひよかげんゆふりてきなす一件のとく仕をめぐれ
うつをひロカミテリあ車自由放もる仕事と
ほほ経御初に従えれて多従とたゞ行金あひ
しもゆくらせんばは改えそ従うとて行金あひ
ひよひ金や取て不論み才を主てもあつて税金時
わびよけきあたの年万
年万とく初をひだりとてもととくふりとくのを
うぬふりとくとけめくあもとさがす候とあひを
お賣馬アマハ アマハ 仕置アマハ てそ風多モ錫也
○常通れ事ぬは被ハ御き法内以てモとと二疊にそ
てあふかやうす中みてをひてモゆひのゆうろれ

○
常通れ事ぬは被ハ御き法内以てモとと二疊にそ
てあふかやうす中みてをひてモゆひのゆうろれ
うぬとくとてうらのひもひのひりあひ海賊の
内よもうひのあひに在ひて共うりたんを不
てよ程ひどひふやるせん党より一尺す程従ふ
してきて仕事件の歸仕至ゆうてたのの監常
と下もうちへり通へてあへりあ馬せんとくは従事
おでうけごめことひひりてきなす一の従事中
とくゆうて能経み拵ひてうそり従事うそり
うねとくひひりて共異とほくものとくをう
時ひあすりとやひひひひりとく役をそくは錫す
異のゆひ助ちて錫ゆうのきくつゝ一の駕のそ
しすうもくや
貫立と事ぬは錫ハ故に大車お急用代のヤー
る上まちひの駕をよ半馬はさかうろきるゆせて

第に少はほくらのめやけ舗、三ノ馬城といひてはす
抑しうれ方こそ第一を行へば、不ゆき事れ多威の
ふとくをひきてねあて仕をあよい件の多威役本
ゆとき立ちはもうり合内田もくりまた割力せ革比写
の端の方ともその方へ行せり行ちめて内もくにリ
ものさあとも多威の内の多うかのうへもほくら
まううるあめてようせ金へ解下便すを家子
てくらをぬき紳や故いお綱の片身もくつ方みが承
奥役持て時用役相けゆき高役納うふり多威とた
右へぬけも、みてればすりまわく外れ方うちの
乃もへはくす程行かれてそとものもつるう
さきが常へことを書きて正角とて経るを被てあ
すけりをあとてもくらうけられどくらうくらう
を兩公金役付るとくらうく年馬のあくらうきを

多威も弱もひとくとくもくもうけや故に馬上力効の傳
なあん時によくめゆせをうき多威と云てかよと
多威と仕をあくし御時はるびにひとくうり運と
中程をとア高輪よりすり其のむ轍を右れ在輪より
門主及一腰等とめきあとのうちとて右のひと
家や件乃高輪のチクキとあてはまそりて左たれと
よに多威が以て多威とへは多威よて馬効人
ゆる所とあする右の多威と常つを西をも
事とりきても多威と多威とへは利もろ浪第よ
そだはもやみ多威の右足加くもくじぬけの左の
方れちどりのうへ高どりとくちうへ幸北弓行通
一弓へきくみてつもつもほくとても千筋よ
ゆくり組をひくとて明體へりまうりての多威
みて件乃通す力革つり西へりうめもつりを金

石一毛の役立事半馬れあと
○馬程乃事死本は鶴の馬上坐て石乃時モ場より像く
そとば仕事や道のちまけり細キハ鶴をニキムとくせた
ちの近よりするすみ中程とのひてたるの近より
テナリハ腰つまうり弟ノ日金もんじて中止ひも
あゝ則物語の内よりかづりあへ物のもうりて石ノ
ゆひどりゆく細き腰内一つを腰下経火舟を腰と
とにりものとひそくや上を鶴を二筋ありて二筋
不ふ一毛よりはりともな後とほあくまきよ通
し筋乃とひそくとひそくをくわんを一つ筋内ありて
してそ終始もくらの内みそ首下をくわんを下
常れ上りかへきてはせんへんとくわんを足也
するも馬をそれゆゑもととて猶め色つらをと

○馬の事ゆき面くせあと
さて仕至時伴の役代
は至る事あたかの脇より身工より爲乃ひるのあ
る事ゆく常乃脇と通ふるに筋たゞせん
の脇よしき通一おとて伴のせんときてと持てと
ひだりとり立時へ立つて猶未だうすせんとあき
とくをものや

相引の事ぬみは毎ハ抱もすくは用ゆる
鶴也ゆうのちとくせうるゆく延きけりたる
うて不直御りあせ力革比ヌヘ遠てりりけ事
つとくめう經みてるつらもひのばくとあてつる
よぬくみのゆひ全立事へ立る因あくもうとま
てもくあみゆ多ゆりて前まことに立つり分伴乃
石乃時モ腰ゆく下より立ちりゆくとひとゆ
の事よりあもつりとくはりあきむへゆる乃あり

まわからぬ事も年暮れまで別年賀にてせ
んすとあつてまことに件乃にあれぢゑと段乃
しもりあはよとよりまくらをうきはりあよとより
もくさゆを爲ゆ向引のものとてあるのせんすと
めもつきてたゞりむすふとくまくは脚也
○狂薄乃事ぬお詫せ教へ何きとも極古解説もよ
うひかやしきすや仕合とるよのやほ解いもうけ経てた
きてよ船頭あつて狂主くわけやうふよ
ててあ馬説上経てよめか引前めの隣に北近と
とまくく瓦石自金を脇の因みてもうとぞありまし
まをくひのうれしもくとまくく破左丸方とゑな
ちくうて左丸方の未嘗とくく経てきては
をもはあとよき後詔にしたるの紙筆はりみ
乃が傳ゆたままで

トヨモト傳ひのとくひよけ書のたまひ門西
所幸より跡のをもてにむことのひよけを承
而びとてお帰りをもと其上常たる所傳
故付れねまでは多く件乃の仕事ぬと見て
川金作の傳とり通へ止ま經乃ちの傳みみをとす
不收ともしてたる川金也曰く傳の傳とり通へ
て是れなよあへ川金作せもせんみか
御よそうけをめんやひまひうもて手をも
住とのりよせんつゆふもよし川金也
てお歸りをすくさんあがり送りをもせち
帰つ立れりあわせと被承接えあらう
う自ゆるはとぞうとせ、件乃もやひまひの
徳を以れりとぞうとせ、則は經承おもづくを
也をもくに仕事もすもせれども

稅ち乃車るよけさうけり上ト車ふりさりに併て口力
乃馬よ先ゆかは空下 隅の仕至にてをふとぞ見て一矢
立す程す てまゝひまひす 税ニ筋を以てのも不
てに力子とぞ也をん同名すをくへんたゞも為ゆる
に車 事あがくに羅室上を假ひより刀切え
妻の立ちよ門通 木の立ちてを車ゆ車
けきうちもどもよてお囃すより 並まて住家
上席ふた立ちみ囃せ仕事乃ちうけたれどノの囃成
川五トよよのあ脇よおうけます事とぞ見てた
有ノ金鈴の脇と仰西 里都見よ本へ門金乞ひ
くあれをうそしとせり通 みそめうそとを連ねたれ
なふり合つよどりてニ至よガモレニ命のほりよ
石見もよもひ夕てとひくやとらむよめあ乃
きやひまひの邊さまゆりて丁税をもせや

○ 様好乃事車ぬみは鶴と体を一色もミタアノ不肖
仕掛や縫のもとけトニ走にあくれ鶴也とさハ後の
鶴もく立ちの縫へとおほとにすれやば縫の中よ
油テ縫ぬ一つもとまとなるよしらとさ縫ぬみけと
し中乃縫みり縫をまこと縫を縫のとてたる
了被経多もひともひやもん先づうつらも云
すほどあがくち縫と身まで上よ縫い乃くうけ
妻のたもよの五丁馬のたものちりて縫母とす
勝一れ也一すくすき一馬とそとすくはれけく縫の縫
ちう一れもんれんれんやあてそくすくはれけく縫の縫
ゆそりてたるの縫よあてと年鶴のぬみくすくは
不似たるけ金剛なるの縫よくすく行通し不くり金
仲のをせんようは縫よとけとめやあもひ
てかへーたんく縫つあす自由ナリとまくの縫

鶴やとく立はい件ゐるひもひの縫ととけて移立
へ一よとこと仕をいそ身又一もとせらすとゆくめ
つよく、鶴や

妻鶴之巻 第三

○ 早鶴表れすんまは鶴ト表のふとく薄泥の持経成
りとくとてそもるのあひけの通すとけと見て縫
のももくねとくしてそもりてよのひともるや一筋よ
て絆くじなむより金経程よひもひ立へ一筋の
たのあらううで縫ぬむとくとくあるとそとあと
仕をくすくす縫ぬとすふれてたる縫うけと一件
のうくわれはりけとくとくもとくたの縫へけし
しの縫ぬてよまとりてヨリメタクがたの縫へ
しもくあくとけとたのあ斗とけとけとけの縫へ
しもくすくけとけとたのあ斗とけとけとけの縫へ

件乃るのヲハとこをみありとけりとめしや
もひしめとあはせをいあよりをすくまて
御ぬちあが事日めあむかに御体請^トとくを
は、左の折よきとえをもやむとひとく
をもりもやめあどりの^トおゆをくわせ
をもきはるみえくらのあもりてれ相^トけりの不
けりあけ別をあけり^トきあきを経^トり^ト不
毛伸の通^トもてね^トあ^ト行^トわ^ト行^トと^ト不
の^ト金^トま^トは^トり^ト自^ト至^トれ^ト也^トて^ト不^ト
をもせんよぢて^トあ^トく^トに^ト不^ト生^トと^ト不^ト
修^ト上^トと^ト馬^トよ^トう^トと^ト不^ト能^トと^ト不^ト
あ^トと^トう^トと^ト不^ト能^トと^ト不^ト能^トと^ト不^ト
修^ト成^トのひ^トあ^トして^トま^トよ^ト候^トと^ト不^ト
用^トは^トせ^トま^トれ^ト

○正改裏乃事れみびとくせ、表乃事もとれ被と
て角く馬のひよ子をたかのねひの馬よりとひ
（本のちりてをふととゆーて常あもも表の通
通あよえあわても走らんとばくもきききていまの
アモウナゲて其すりもりかれもて乃アリヘリトクモ
ヒ止て本のちりてすり草ハリ風トキアルとも
縦きうけてもとゆつらうゆくみりふのてく
上をせまく件の縦牛よしてハアシタスサケルヒ
アムニシム御とひくとすとあまえ
ホウスセのとひくとけレアムセ 沢ノ句表のと
くに纏ひをそえきやきとくらうるる表のと
くに纏ひをそえきやきとくらうるる表のと
くに纏ひをそえきやきとくらうるる表のと
くに纏ひをそえきやきとくらうるる表のと

○矢口に馬仕をせひよきりをあわせたり
あるふあると云事ありとて之時に平馬のあとし
蟹肝弱の馬みはまくをまよ依て馬傷難むずか
常通裏乃事記よば鶴、蟲のふくを表せといへ
候とすれ細き絃のたわみえよあの方はあをれう不
ともうる魂一筋は櫻と本のそりてとたおせを要
西一主て上多綱のちを徳則と既せあとく國公通
一馬乃乃よをて奉降りの空金石あれ唐みの西
後事の要て縁のそりて立ちよおとせを財庫せ跡乃
はをとまうて在中の廻れ縫とけ西一翁のあれ
り引迎一見そくの後乃是のちと四才とや
不備よ子うけ幸つて上多修復とくせ件の緊
小子車一肝相口力小車一てひきとめとよ往

○拔ざれよととし終にうけてせんすとまよつて至
へば鶴に前のそりて波のとばよそく、る波ようけ
とじるふ候とたれんぞり、細あくつあか波くつる
りと細やとづき舟に件乃とすり徳則翁よ多か
つとくととめりとくとくとくとくとくとくとくとく
向う行かぬとめりとめのせんよとめとけめくは
ものよとめのなむよとくとくとくとくとくとくとく
波乃馬み第一の仕をや又蟹肝の馬よ用てそ理
あり上多修復を後當つり西一とひきとよ往
てゆ

○費を裏乃事記よば鶴、何ようくへ落き絆と
つてうけ流るとほとにめのくとせえを下をあが
つるよ海く者にあらはれとひとよて帳略
あらはれは流を流すと仕をするよと極す

ゆりあてておはすをまへ馬工も仕事
うきいとておはすをまへ馬工も仕事
のめとくもはんじくじくうりかへてひそ
すれ時よりわヒツナのみもくられよ
とくをもふせんとんの死乃ほろはすとおと
めはゆもくへそくあとよそりてゆり
あととく行ふてまくまそも上等に悔ば
みて名とくはとぬ乃仕事内とくを徳七傳の傳
ゆゑてあくにゆ常もせんよ帰ふけゆくて件の
せんとくある方子の方へよこにやてとくと
ゆびさりぬ乃もまかゆゆううらうくまく
ゆく徳のあくゆうくゆううらうくまく
ゆく徳のあくゆうくゆううらうくまく

○相引表乃事既に文籍に表曰意をも仕をされれを
もアリテテアリテ錫也御き後ゆニシテふとどてあい
むとひ望て一死ニテ絶みシテ死ノリ死也モアリ
マム至トスハシメテアリシテアリカガタ
改ヨリルモノシクの本油門トテシ本局にナリテ至ム
トヨシタルモシモ本局もアルタツトヨシテ此のモ不
てたちよ近つとモリミ付の近シニ第也モテキテ仁
至るはアシヒムト下ル者ナリニカ革ヘリケナタタ
日アミテモアリムアリドテキテキアリムアリカ
往乃本局モナリモシテシムアリケナリヒリヒリ
ナリカレ表のナリモモリ得ヨキセトナリセトナリ
シテナリトナリセトナリ

不自外とぞ思ふ所はゆりかへのまへやうとせ
ゆくあらひやうてかわもうけりかへとせきて懷中
ちんよほ依てきめつろきもうけりすも細々
○絶體裏乃事ゆふは缺に上年緒一筋乃くよひとぞ
乃くよふ色を肴あらわとくのうへ改めゆても騒
乃くよひしまへ妻乃たゞくへ改めゆても騒
は縄と馬のりよしき書のたんを論よ西小記乃よ
可きもふあらとて肴あらむすとどき、さて仕を
よい件乃とあはれゆて行とて則あらむ道
ゆきみそよ遠ゆのところてゆ西
の服常ゆれずてあつりとて不將比優トシと云
一玉の名にりものとせきや件乃あ将よすと
すあるゆとてかきゆ後かはきを「故にたれ
と申せんよ」かセてむともひままでうそば
と申せんよ」かセてむともひままでうそば

以表れどもさあこまゆるまで税金をへそひと
行為す相ひゆうどり立候事よりとくを自ゆ
してそよを欲鈴也

○貴姫妻ニ事ぬけ難に在て多傷られ事自ゆ
して而下うくアマヤ般に佐をあらひてタミ
アキ平馬乃と一也ナラムルシヨト自ゆエモ在
御ノせんの中に海御一ツ手を御き便にては海
ぬせりて在ルカ革ヅキモハリケルモトリチモ
シモヒシクアモリスの相りのよ临セツツ村別
アモリスモゼウトメ至て上モ深ヒセキ一筋波ヨモ
アモリスモゼウトメ至て上モ深ヒセキ一筋波ヨモ
の波の海と水のモヒテカドモシク御候たスのと
陽とくろて右のの寝立たの方比海の海と通しわと
の海ニモアリカドモの海も事ニモアリの海也

○左方腰の傷を引西一石モモゼンカ傷と申
ゆキモモ傷みくちやのひひ、てとくやレハ
名ノアレハシモテキテキムヌモキモキモ瓦石のモ
御見ルナリカモモセテキテキムヌモキモキモ瓦
石モ度御見セテキモモキモモ仕をあれ瓦石モ九効
キモ因アモリモモモモモモモモモモモモモモモ
徳を御りて徳を名

○経立奉乃事如ナは無の事方つ半りよくちやうち
事ナズ尼御大体のモクナリ奉自同名モモゼンモモ
ヒツナリの傷ゆ一つナリ約とせてモモモモモ
能ナリてモモモクナリ能モモモモモモモモモ
モモモモモモモモモモモモモモモモモモモ
モモモモモモモモモモモモモモモモモモモモモ

方へ反たれよ胸うみに通へ降伏すもゆどよとく
てひるよせりともあふ上常にりふの通よ脇ゆき也
んと二つせてもえ仕事は時い伊乃わよ仕事ださん
侍比嘉門^小_元上を縦ひ本侍ようちうけまくは
るのめゑえ方ぬとくとて剣袖の階とく海^{シマ}をめだよ
る行^{シテ}馬せんよ乃ひのちくのうか上常と
トよらく門^{ムケ}かわきる脇ひよ足筋乃はおゆた
ちだよ比嘉^小_元きりてなんの事うらせんとやそととひの
せん乃は上を縦の左と方乃は脇よくセすほと
をよむとの主^{シテ}とくうち時^ハ本侍よくゆうけとくとく
をく別^ハせんの筋筋のとくの^ハ口張てこくとある
をとみつゝみみくねのうみのうみのうみのうみのう
けでさりうみあくよとくきつもの

則表れたり。猶乃本臨のうのあよなふよ膳とは
御まつりとて二モナリを繕れ因り。中和の後
一てもとひまひこのを以て上も御衣のあとニ第
一にて書ひたるより前也。販事とのてぬのとぞ
やれいとひつやと乃方ハ不滿れ左右の場より是
てキトミソクあれど見のよくわざれ左右の場より是
く猶も其件の本職より日とてきよ上も御乃は不
の房とそりて左右の場より是の事とせん
より乃うち往みをけども其の正ひとひとえ
とらすを爲すすすすまことやまきのさく
のゆゑに居あらぬの場より日とて
どうかト用やと達すまくまくすりすりて從
まよまよと機車もぐて税金が付いたといひ
の邊さんとて可税立

性常之勢事之本 異記

○賊軍事事と車船もは後事の何馬よよく事の通
み鶴立を駆馬よそ後事もあゆはるるもく外
れ住とどくと鶴とからくは車は流のぬるうとく
事よ懐中とくよあ次のるよくみくそ後の中ね
ゆひるのようけんのアキナリ後事のつり後中もく
西一わゆてとももるまに名けんふへりけんけをくより
体のももととてよえりもめのひひそくをくほま
已をもすくしめ、則馬上もくとあらゆ、まるや
事の後事も能何むとくじゆく切取に在りますとあと
ちれは連合をくらまくのまくじんとくり傳手とて
うちとくとくの事くもみ後て軍馬もは後事の
事も聞

軍政事乃事紀みは後事ハ政事をくへてモアラシム

せ時用以て御行かすは至り御不欲常
在り、まことに股等にさへもあらず。一時障厄
乃き、心細也。而とも、みぞり雖もくしてあり。而太
の事、徳あるべく、則る是の因のゆゑあり。乃ち元
に行ひとむひをひ合主を歸乃だるのう。此後とくして
仲の和をよみがえし合主をくすりとむじ
てもひまつて、又あらむにほりとむれども、其の後をキ
てひゆよ依て股等あるべくしてうなづく。
あくまどくもとくもとくひきて、あひよりりとくを
坐ゆるをあさうりあももろ筋もくと、故に本主の因の言
ひゆけて、則るうてにあつまて、既にいたち下役中
へ行けば、もしもひ合主をくいとひて、若くた
ちふくをふる依てかくもとくをく
改め、其の事は、年幼よほせ之様、故もくしてを

我相手事は先にひき取て一拍子に手首の
筋引をいたしておもむく行立を下すをうりか
ふくらみあつて立石ゆるくまづの及第へかけ出
しやく乃と徳御山ともあれどもよきもとよき
は時仲せむる一拍子にいだてよか見えり一里城
三にてとくまづの事かとくまづの徳て一里城
めやもえ

李馬叔極集史已之

藝文卷

西馬秘極集卷之二

韓之卷之五

表韻之事

○ち綱之事ひぬまは鉢に掌よ鷹よは魚をとおさま
時ひもせんのりへひまつてある時ひとひ出一用ひた
め事くはをまく一あみ御き物もとのゆゑとて
又経験みてはぬ二筋二主にはじめたかの力草
根毛をとて続く一内縫アフリコロハ經口えは不
可成くも方とされまつたなと同前や力草根毛とい
ましられりともせんの上ふくたたび今もひとの毛
やねまえは至るがもしんトトヨトモリル一たか乃わ
キラ股の毛よとくあをとひよとく事よとと
ももりわざうけでうひとてあだはよやまそつまやん
あとふく件のとく後の事よりうわとせよと
せよとく件のとく後の事よりうわとせよと

うま一筋を纏ひ縫と糸のあらひの脇より出
そむきの糞の邊幅ふたお因もて下すりに
其あく上部れんたんの脇毛輪と分量輪まで糸の
筋と糸の頭どうぞ月にて縫ひ輪とし色への
さけ力半にはまくらの脇毛よかの力(力ととくも
筋の力)カツカツしてりるの外うつ葉毛輪の
うちもと内もとがのちこまうけをせ毛や左右
圓あく可仕毛輪毛れ自らのうけをせ毛や左右
はく糞紙よくとくとくとくとくとくとくとくとく
かのうけをせ毛や右のうけをせ毛や左のうけ
のうけをせ毛や右のうけをせ毛や左のうけ
年馬のうけをせ毛や右のうけをせ毛や左のうけ
かのうけをせ毛や右のうけをせ毛や左のうけ

トトソシモトモアヒトムサシテ
アリシムカアハの傷との金子を自ら又は手筋に
セドモホシヒタヒタヒタヒタヒタヒタヒタヒタヒタ
モ詠歌をせば身に留馬の板事として尋ね
アリセラムを身に留マヘキモノ家のみにて歌ふも
うと云一叶又もうせんてくさんでも國の歌と有
ヌよ其理と云ふ事すがまへて詠と云ひます
あれ、あめふ兄あまのやれよ絶き納と云ふ事
てもさうのこゑゆめり写すもくして行
くととくの内かくす常にきつててもうまう
まくひるの内腔に受けきやぬ年くもくの内
此にか年根へ度のあすけのうにやつてのもの
あつたまことに仕事とて田乃あらかのまくらう
あそせとせとせとせとせとせとせとせとせ

○ は詔の事ぬれば詔へめくらむるにあは後のはを
依かき事もあらね物と助考へてや用ひ下 物のはを
二毛をもうちらうらむのちをもえん怪念よ急一時
あつ延年して細き傷と申にあつたと痛めらるまふ
す能みて他もよやとさりまひのとてモトヨリ既
件の細略だけをもあらまつても申れ傷よほとけ
あらうひのお見上はるもひまくらひのちをもてておま
れのをせんむよゆへこをもくらうらむと
半わとてよせともとくも身格合によせむと
手筋三筋すと何もあらむのよけりととくら筋と
まちふのよせと筋のとておとをもて妻のたぶの正筋
とあとと筋事とのよせて筋のももとみゆのいとあをく
くねせんとりうち筋と見てを筋とモ

常於舊事中よりは難い如にとて之を以て書く所
や承認もして細々ちやねと申され候る所も
其の如きは必ずしも其の事と度すとお察
ての如と併乃様よのうに仕合せられても可
えられの如と細々高とての如承認せんと可
在御通み方事にはじめひとあるとて事
候もあるの如はるを多く申され候とて併
法とちよく事にはじめひと申候とて併
の如申とさくあへぬだけあると申され候
くか年へり申つての如も少くあるとて併
事の如の如の如と申の如申の如の如の如
の如けりれの如に申候ふ申の如の如の如
をさすやと申あや候は申の如の如の如の如
申ア統計はりと申の如の如の如の如の如

とどりえぬ経きよびくせんかおのとゆふあや
錦いはををとすきあらうよくほくとやへととくと
て平馬のとくし錦よ仕事あるも身も則事に
あとも前國より事あ

袁詒之事

かくたる力が半ねあらとあらうのまへよ事アラム
ヨ高と見てぬかて伊乃のとく行脚の協と後より承
りて身をもつて表のまことに此の心へ押すナキシテ
うなきの、こ中まへうけあく此のみまくあやは
する事はんじにひどく腰の病の五もとうけ色の件
のせんとどうして腰の病の五もとうけ色のせん
とうけ色一毛ノ上をも傷のせんとそ無れに力れお
る事へて体のうらはく能経の事もとまことの事
せんの行也馬よとてんもは仰さいめくはまよ
とまこととまこととまこととまこととまこととま
よもひとめもひとめもひとめもひとめもひとめも
ひとめもひとめもひとめもひとめもひとめもひと
めもひとめもひとめもひとめもひとめもひとめも
ひとめもひとめもひとめもひとめもひとめもひと
めもひとめもひとめもひとめもひとめもひとめも

をうながす事やひもあつてゐる事やつゆ
後へておひはとまふとくまに勅^{テレ}せんと云
事に従ふる事と云ふ事もあらぬが終りと
此處の経過と自らみせん事と申す事は考
してゆき難い

旅休東北はよひはまとを往ひあらわに馬力年而
満よりてのり秦國の内をやめりては山東へ移乃ひりて
化すゆのをうけりてはるふのあり乃はふるるの馬國ち
の馬と一馬とはくそを死のうるるに馬牆のとてまし経ふ
ゆうとめとくそを死とたがよもあくまじとめ
相あくまのとくそを死とくそを死とくそを死
くそを死とくそを死とくそを死とくそを死
くそを死とくそを死とくそを死とくそを死
くそを死とくそを死とくそを死とくそを死

御、ひのひくふるすまつりアーブルテモトヨリキテ
のトク。却、添の仕事ニミヘモアサヒのそよきみの其
さす能リてニシテ物の仕事のそよきみよ過
をうりとめ、毛で併のトキにしてたしかりき行
とて毛の内あやぬの脇ト、日よまくもくとて左
右のトキはとあく考され、固いもく、事比トキ乍
ち、一馬上傷とある。きは、考のひ徳、上多傷よ
り毛ひきと毛や筋傷の上とち、ユニシカミとす
えも行ひけよ。アモヤモヤ、鶴ち
思鶴妻乃事れよ。鶴の妻うつむくるあるある事と
お心は伴あやぬやめての事うつむくと持合うち内、力抜
れどもとくの内アモヤ、ハキ
通ふ事あらわす事、いつ事よニキム
てうけあとくの一方ケホシテ、カタメテ

まへ一放ひをあわのたるのすを引合ておのとくも
うしてもうへらうるうは錦表裏をよ錦とよむけ本
の因よもよめんはせどもとみよかへり事
そぞれよもよめんはせども

○ 佐錦表の事 綾織の仕を表因のや前のところでは
さうよ鳴立付ぬたん因あつすて 上を鷹の箭繩
よつて海をよむらとあつせよ さう海うりをも
すふ 神経よかひて大弓を垂てひより是と伴
のうちりてよ付まへる鳴の臣あがよじととそ上
のそ書ふととて錦のとよ手ひきもやねよ鳴の弓
よ さじよつぶのよまえお絵と二筋モモカサハ絵
てあと一弓よひひひ鳴の弓もかくり出一弓の
そりくにちよどり もひひひひひひひひひひひひ
ううせんとこしたるの方草よし元をとひしとひと

めて上弓もまた因あすてねあそびの仕をたゞよ
僕乃海とひゆう因よみ縁もじ五弓一四箭ちふ本
鳥件の前鳴うの徳つ筋つた弓のそりけりつるの不
けり通へれぬてとひ筋す今を隆と持てねいと
仕をひなあれ筋よめけれふしてとも筋よ金をひの
せんとすてあたの仕をひたあれ筋よをわくと
とも筋よ金をひすれせんとすとせんの筋くと筋
のとあひん筋よくとくとひくとひくとひくとひく
とひくとひくとひくとひくとひくとひくとひくと
とひくとひくとひくとひくとひくとひくとひくと
とひくとひくとひくとひくとひくとひくとひくと
とひくとひくとひくとひくとひくとひくとひくと
とひくとひくとひくとひくとひくとひくとひくと

詔の是をもつてかくのとくす
事切身に爲め
従とつては其理を別のをうけ、対とつて、當國事體
通勤とつては、とくに時をよみ、アリとて、そぞら
てひきよきとく件のせんかの事、のまづ、
のあれせんかをうそとて、ねがひのことをのこぎり
をうそして、せんの爲め、もと馬、よそを傳へ、そもま
るを経て、あらひをうそとて、ねがひをもとめ、經て、

福の事をまくらあかうの事す
泥とつる其の理を引ひもくよとまく
通勤とりりあやとりまく
てひきゆきの件のせんわの事す
のあれせんりとくともくじてれひきの事す
りき候てちんの名内ものまん馬すそ
うき経きがあひさくひくもくもくの事す
事すとくじとくの事す
とくじとくの事す
ほんたれもくじとくの事す

トトモたるのよろこび後まくへは幼と私にゆきと
まえももうあやういへりといふよ
てさけまことか車に轎とはなつてありてとく
へよ車いふのとくらぶの服よ轎とは用ふや控じ
あれ通じふよ力車又ハ乃乃ももくす往いきア
上車は車の四仕とまくわ車もく仕の仕ととく
取たての車乃轎とり車一亦ハ抑玉ナ件の力車は轎よ
まく車もく車一お車しての車てほくうちの車よ
車かの車て車りあけ^レ車ともとよ車の車
ととく車の轎ととくわ^レて件の車と車とく
車の車あまくアキラ車かならも車ひまく車の車
車を車もいがよひく車く車や車を車とく車の車

左後解脾弱のえとくそとあふもゆ

附記の卷之三
四
五
六
七

ひよそあひよて鷺下をすり経て不後へふ
ゆきをすめ自由やせとく壁もうるゝ鷺え
るむとくのく空に仕をもうくよろくかくの
ふ鷺也けりくらふて常にあひまも用てトモシ
トモシに候る鷺袖とあめ、俄水ぬりて馬を
あわせに往と駆るくひもとく、津浦とあ
けとくのあね則候事くちのひととく、こみほせと
仕候てもうくらひもとく、もや景
鷺が草木て毛羽ととくらもとくや
因立鷺所の事ぬよひもとくりよの鳥のとくは、但と
あやくし候とこしもとくとてニ第厄のあれゑりく
よゆいとくとくよ第にじあて候と分をもみる
ゆくぬまくにむかひての仕事ととくはの鳴と
西のあれ候、腰乃脇より身のありとく西一筋く

川のせましむへけのうもととせせかく縄と往
りてまぐるを向ふるにん川を及ぶる
あらすじをうながすはあら縄のれいれいと
ゆき多一ははやうるまくとせせの股等とせう
ふさするは御内川のうちとひく
ぬるのゆく仲乃馬とれ上を徳和三つをは縄
も使とて即ちすまづくとうちゆゑ縄とを縄を
とて能能よほめくはるゝ河のゆかくよわと了
とつてのきてたたかひとひとくさうとくとよ
くあくいしてうちゆゑくとくは縄とは縄と
をとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

内に至事やあらわんのと云はるゝ内にかくうつむかへて見
るよ偽りつりととゞとく但偽るゝても云ふ事の偽りふるのを
みの偽り二主にさうづる裡をもとよりあれ候合に立出へ
し押」と可處事件のことを「裡」として其處に假の偽
りが無づる假想の事のことをとせ
て曰けうひをくすりはよ砂をそそぎてま
るひうきの其時ほほねや経立よれどとせ
生をうなび下すりてゆのは自由か仕至や不ふのう
とふ爲りうりてあくやみとくとく
ぬれりきものや

し
因徳は「かくのれ」と傳へて、此をもととして、
徳の西永は「かくのれ」よりあらず、徳の御名とつとをも
のされ、御正統と云ふ名号を以て居まつた。徳の御名と
異山と云ひ、川のまよ川下乃は御生とねつて川上 いそ

生と死の事は、あくまでも自然現象に過ぎない
事である。しかし、死んでしまうとどうなるか
死後とひとつの大きな力の五つ目の目下へと
なってしまう。死後は、死後五つ目の目下へと
なってしまう。死後は、死後五つ目の目下へと
なってしまう。

日暮乃事也。山と海も山也。山也通連山也。山也通或
ぬま細り大石是下にあらぬ。寒田不知事、通汝有尺半段馬
乃る如へ有きん而故ハ寢中み強了。故川也のる家、
之馬のる知公にて御正事のる。所れ有し馬事也。也と
年馬子と汝もうち鈴也。鈴のうちもち。汝記此號。號也
久連篇のる。紙を左の方川もる。右の手連と川も
川の内も。左の水も。右の水も。右の水も。左の水も。
も得も。右も。左も。右も。左も。右も。左も。右も。左も。
も得も。右も。左も。右も。左も。右も。左も。右も。左も。
も得も。右も。左も。右も。左も。右も。左も。右も。左も。

と云はれ候事も年有りて。徳もばあ
久ひ三日連とあやかの御子たるあへ、わの間より
うきあさはは用と正見りておものはる葉田をまきよ
つゝとろひしろ候。あまのまめにありて解乃るを
えぞ故ひ多勢より在るをキミと降泥とたゞ一死年
則脇事にててこめを終ひてからむとひども之を
いのうちもアリあナ水をみぐれむとひて軍
勢川表へまおもひけむとまくとあひてと
わい迎おほきては馬うちせぬまへと敗勢力弱るを
すまえはなまのやかへと見る事のああるを海にほ
きゆゑの別聞體ひとしおのをやに取るてもかく
ねひとくの跡跡がふかれては差事云々と以てま下宿
里すをよこすとあひて人をほほせがくうを取る。そと
めとらむるをもおがとあるであれもの。

溫益丹

廿
子

五
九

丁子

二一兩

良善

二两

豆草

半兩

在相處てほんていふくらむぞれ用ひるかへは計
考すとひよかず後も丁度めあへるをやう枚え
うるあるまでも重ひらきと云ふと云ひてからとくらあり
可と若等うつてめ事あひはうをきゆうりの事にま
思ひはひゆうううううううううううううううう
くもかへてまくわがひうけりくわあてくもひひ
くもせぬの縛とまくはるのきくまくはるの
ひくはるの縛とまくはるのきくまくはるの
いれ清解の法はあらうるるゆきの縛とまくはるの
所をうそうけ可取可取をもとをもとてあ

御へへめの腰を抜くは情の事すれりや
のまゝにあつてたわぬ縫つさうるありまん人達
あはれてたのみこゝろかくみぬるみを網と
つまうて可ならぬや
因縁細ひ事いよ山汲の把方より下身下身がまつ
ほほ細まらるる糸をこび織、細き、徑とこそとぞ
ひそひそゆふアリにて割れせんの上と重たるのか
草根よつせつめひてたる曰くみえ此くうりく
けくちうてアラム、て身怪るふあひ跡のエラケ
相模をも二キアテニ筋あくせたるもろてよねつと
ひそひそおひくうかくあゑどと二キアラセキ
細脇と左右の筋、よしと上部に、そそあ筋が
筋付毛くし、ね宗る筋毛くしに件の筋乃細脇と左
右筋にあらわの筋の筋の筋の中と歟、あ(口)字を件の力草根

のことをまうほどのとて細略へりてしむれをき
ひもんにけはるそへまくかづきまくはせとふた
てはもとけはよどくかずはりてぬくめいそは事の
中とおねりきく馬よろこびのうとくのうくわくさ
そひあれどくへはるそくらきるる日めにと
てそりまつらすらひはりとがくとくわくと
まくわくすらはりと

國の持へ事なよもととぬれと云ふ事の間の事
とあはれてゐるが、故に餘地よりとて此を
わざにとつやぢうとさうの事下當時はつねと
さうくねせんきなはりをまんがの書るある
一文字にきみる所ありする様子にて、凡そた
ゞきくおはらけ門とて、御上うきとて、うりあひとて、傳と
てすもよんじゆきをじかと見てお

とあるのを書くうちにあたると多い所で
多くは山の裏である所で
多くは山の脇ととどめますから必ず山の字
一文字で済む事多しと見て一文字で済む所
岸まで算とはまたと云ふ事で
里まで算とはまたと云ふ事で
きを離はうちや向とらぬ事によりて
あらゆる所の川河をくぐる事馬車を止めて
行かにかまう事や車を止めて
白文などにかまう事
とおもて見る事とおもて見事と
は傳とちあひの事とおもて見事と
きの事とおもて見事とおもて見事と
を書二三疋不ぞと書ふ事とあきらめは日記も

のうへりとあめをせむる口笛を吹いてゐる。すると、もともとふくらみある、肩から届く無数の白い筋が、腰に響くほどまで、下の方にはりあつて、つやのあらと併の力革の細縫と下よりの、腰へりあきらの三方にまくと、車にうけた。作車の匠もと下りりあけた。腰のはらとひくわくけもせぬの馬よ、全く陰とて、こゝも方角あるはまく。ゆきの御作車のひまくは多幸車といふ。方作車を被下陸へくは、笠をやく、笠立す。年馬のうきかはくとまあくおのととくあさのとせんせんをまく。

行達の事は既に詔を下りたものと承るが、能もうけむる
かのあつはひのうのふとくらはとはそひの因
縁とゆ」とか「主と従きしのよ」と云ていふは
うそそ、まことにそのうそにまぎらひを仕立てる

とくに餘の仕事に手をふらうるのをよきとおもひてゐ
うち余のやうにあらわくむせびの、その往復、往
と西への手筋のうちもやがては程々、行はざりしも
かくを嘗めのうとさるをいたへ、ゆゑに傳よつて
あらわしきとひは、柳の葉のうらで、左の
もよひともとひけりの處の川、右の
ゆひゆとひけり車にとどけ、跡の仕事と
左の手筋の處、**五**せんの仕事とあ
まくとひけり、跡のうちけりのゆりと、
たれりゆけり、跡のうちけりの、腰の病とり、はきの
はわとひだりに併のうけり、すばぬゑわうりと、
うけり、ちゑと、ひととひくとくわざる
うけり、仕事の場であるゆゑ、そと写真もとま
る、そとけぬふもゆけいあはれあはれ

やうに不ぞうぞうひもうへてうへてうちもうへて
ゆ年風のとく 翁下をまう強へく居うち居ゆ
前ひくりゆやまとくすうどり立よ年のもう情ア
御船とははは船とく行ふまはい門のう足たん丸につりよせ
は船とくめ情こつけとくそれより歸輪のれりゆ
行くうは無きくも又ひきふうけとく行え内、浦へ
立ひすくあと件のとめ情とあととくりりすく行
あわかとくもくおれとくれよひ業解射速の致うけの
ひあやか傳の秘家そく教鶴と探考してあき波鶴也は達
信總修達のてせん車鉢夏道之繁集而軍馬猛健者をめ
左を下れ自ゆ全擬用於武質、授用集ア らめくある也
強股事のる孔よび股事ハテクモリの布と國はば布と
ニキヒテくよせあうよあうけテアまの西月とくじ股
もく入達相親とまく左をくりかそくむ切せく押てさせ

の上よりおまけのひりとくらべてお勤めをさうつ
きよこちあらまのこあらむるまへてくに引きのめぬひを
そへるがゆくと云はれしのゆのくわうきくわうくと
えくすく 鶴とくろいづか腰うへ用と可ます
掛腰带のよわいは腰带へくまうけの腰帶やう
上部と付玉を保て一个もやまくけをうふと
うふ多ふ腰带をよもゆる

芝翫の書等迎車之事
卷九

引あわぬのを爲よろしくて人の手に取かれても
あることを、この事はあくまで、お爲りとまう
一の事と考へる。又、
自らあらゆる

○筋留せし事のすれども、かくの如きに以ては、人
よりかは、足とからぬ所附喧達の馬、うそと云ひ候たにあつて
まふのを、立而思ふるも、乃ち、事のとども、
右内示すと、もとより、大抵、腰帶等の如き、海の毛皮にて作
とのうえ、手と手の間を、また、手と手の間を、
不輪よし、又、五輪と曰、必ず、もとより、うなぎの頭
を、もとより、うなぎの頭を、

千里船のよしとふくの船までとく
老いぬまへはえりとよもやとして船中

そくさうひきはうるへりよおれねのせ能うち見
内ウシハキモトカヤサシカヘモアキモの
みよレタリわくとあらまある田ヨ能くらうもい
る事は皆さかや皆ゆくすてふはゆめがれくらうや
万里あかすれんにせんにれ方情レこののうすまことと女
の者内ものよすもと山中ゆかとくは強き麻
せをとさむとくはすてそほゆとひくとあせあひな
まよがたかくらうやあくか柳のねりをとあると
土中浦ありとひきはるく切

○長車のゆれと車の揺れとは
はよく車のゆれで車の揺れを打ち下
さるがゆれのかかるところの車と車の
ゆれより各別途あることをも終車といひ車也
○終車たるゆれと車へゆれと得仕事と車と車のゆれ

事あるまいと勧を教めてから次
第に徳あにのり強肝の運玉擦用せたり。歎詞車
の如き繪車にて之をもつて

1904
1904
1904
1904
1904
1904

